

LD傾向のある小学6年生の児童へ音声教材等による読み上げを活用し、学習に取り組んだ合理的配慮の事例

1. 事例の概要

A児は通常の学級に在籍している小学6年生で、知的な遅れはないがLD傾向がみられる児童である。他の児童とかかわることはできるが語彙が少なく、会話に多少の違和感を覚えることがある。学習面においては数的な概念が定着していないせいか、数字の入った文章の理解や文章読解が苦手である。漢字の書き取りにおいて大体は習得しているが、細部の誤りがある。ノートは丁寧に板書を写しているが時間がかかり、書く・聞く・理解する等同時処理ができず学習に遅れが生じている。A児は学習意欲があり、本人の希望もあり朝学習や放課後学習を通じて、個別の学習支援を行っている。算数は時間をかけて計算問題を解くことができるが、文章題になると取り組むことができなくなる。そこで音声教材等を活用し、問題文を読み上げ、解説することによって問題を解くことができるようになった。中学校進学に向けて引継ぎをスムーズに行っていくために中学校区において合同の研修を行い、配慮を必要とする児童の心理的な理解を深めた。

キーワード コミュニケーション、読み上げ、注意集中、個別学習、音声教材

2. 児童の実態

A児はB小学校の通常の学級に在籍している小学6年生である。IQは平均域であるがLD傾向が見られる。おとなしく穏やかな性格であり、集団の中で問題行動を起こすことはないため、直接的な支援が得られにくい。自己表現力が乏しいため、自らの困難さを言語化して伝えることができていない。学習場面においては担任の全体指示を聞き、ゆっくりではあるが取り組むことができる。授業中は真面目に取り組んでいるように見え、板書も丁寧に写すことができています。しかしながら、文章を読みながら内容を理解することができていないようである。

3. 本事例に関する基礎的環境整備

- C市では、市の相談機関や合理的配慮協力員が授業を参観し、校内委員会にて指導方法や合理的な配慮について検討している。また、関係者会議を開催し、合理的配慮協力員・市の相談機関が支援会議の情報を受け、アセスメントの方法や評価の指標、支援の在り方等、さらに具体的な内容について検討している。また、校内委員会を開催し、情報の共有と他機関との連携を行っている。【基礎1】
- A児及び保護者の意向を取り入れた個別の指導計画を作成している。合理的配慮については、見直しを行いながら負担なく進めている。【基礎3】
- 視覚的な刺激のある教材の活用及び学習への参加刺激を高めるためにグループ学習によって学びの支援を行う。【基礎4】
- C市ではスクールカウンセラー、支援員を児童生徒の実態に応じて配置している。B小学校では特別支援教育コーディネーターを2名指名し、事例検討会や研修会に

- 参加し、専門性を高めている。市の相談機関と合理的配慮協力員が授業を参観し、指導・助言を行い、結果をフィードバックして教員の実践力を高めている。【基礎6】
- B小学校では全校職員で交流及び共同学習に計画的に取り組んでいる。そこで、特別支援学級の児童の個性の理解を深めるために、1、3、5年生は必ず特別支援学級での交流授業を行っている。【基礎8】

4. 合意形成のプロセス

担任からの学習の習得に時間がかかりうまくいっていないとの申出を受け、校内委員会にて検討した。特別支援教育コーディネーターが授業を参観し、具体的な支援について助言を行った。中学への進学に向けたA児の効果的な学習支援の在り方を検討したいという旨を保護者に伝え、具体的な支援の内容について丁寧に説明し、合理的配慮の提供について合意に至った。

5. 合理的配慮の実際

- 朝学習の時間では予習的な学習を進め、授業中に「できる」「分かった」という感覚を育て、授業への参加をしやすくしている。また、課題の量等の調整を行っている。【合理①-1-1】
- グループ学習を取り入れ、児童間で話し合いの時間を設け、役割を設定し、役割に応じて意見を出して、発表ができるようにしている。また、音声教材や音声教科書を教材として活用し、抵抗感が少なく使用できる環境を整える。【合理①-2-1】
- 時間をかけても丁寧に組みめるような学級内の仕事を積極的に任せている。【合理①-2-2】
- 支援員による個別の学習支援において、学習面だけでなく、個別の面談の時間として活用し、児童の心身の状況を把握している。【合理①-2-3】
- 校長がインクルーシブ教育システムの理解促進のための通信を発行し、校内のみならず中学校区の幼・小・中学校の教職員に配付している。また、保護者への啓発を図っている。職員研修においても発達障害の疑似体験を通じて困難さについて理解を深めた。【合理②-2】
- 学習の分からないところや予習を行うために朝学習と放課後学習を行っており、本人の希望によって参加することができる。【合理③-2】

6. 本事例の成果と課題

読み上げ等による支援と予習の支援により、学びに時間がかかる児童にとって授業への参加がしやすくなることが分かった。中学校区での研修は発達障害に対する共通理解を得ることができ、連携の意識を高め引継ぎの際の温度差の解消につながった。

問題行動がなく、おとなしいA児は支援の枠から漏れてしまいがちになる。しかし、学習のつまずきは、学校生活へのつまずきとつながり、不登校になりやすく、遅れが広がることで学校への登校が困難になってしまう。中学校に進学するにあたりA児の強みを丁寧に伝えていくことと、授業そのものがユニバーサルデザイン化され、学習参加意識を高め、学習意欲が継続できるような環境づくりが必要である。